

(財)岩手県文化振興事業団博物館
岩手県立博物館

川向 富貴子

108 期日文、112 期博前文

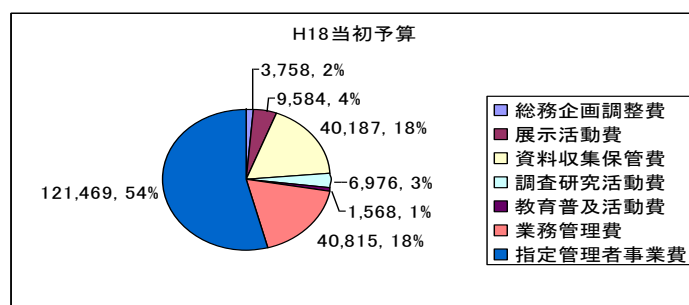


【沿革】岩手県立博物館は県制 100 周年を記念し昭和 55 年 10 月に地質・考古・歴史・民俗・生物・近代美術・文化財科学の 7 部門を要する総合博物館として開館した。その後は常設展示室の部分改修、ハイビジョン設置(平成 9 年度/特別展示室の縮小)、古民家 2 棟の全面改修(平成 16, 17 年度)、県立美術館の設置に伴う近代美術部門の移管(平成 13 年)を経て今日に至っている。平成 6 年度からはリニューアルに向けた取り組みも行っているが、諸々の事情により実現には至っていない。

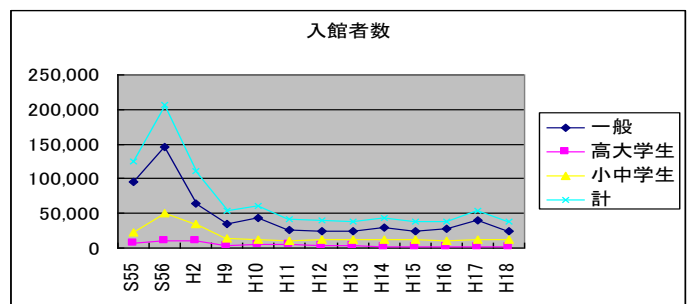
【体制】学芸部門職員は現在 17 名からなり、地質、考古、歴史、民俗、生物、文化財科学の専門部門に分かれ、展示、資料管理、教育普及事業運営等の博物館活動に従事している。また、学芸部門職員には重層的に課制がしかかれており、調査研究・広報課、資料収集・保管管理課、展示・教育普及課に所属し各々の業務の総括を行っている。このほか、主として解説業務をになう非常勤専門職員が 12 名配属されている。ボランティアの導入は展覧会の運営補助など部分的に実施されているが、あくまで物理的に人員が不足している場合の緊急措置であり積極的なものとは言いがたい。ちなみに、当館では平成 18 年度より施設・設備等の管理部門において指定管理者制度が導入された。しかし、その選定にあたっては従前通りの(財)岩手県文化振興事業団 1 団体のみが申請を行ったため、現在のところ体制に大きな変化は生じていない。

【予算】当館の予算総額(人件費を除く)は平成 18 年度の場合 224,357 千円、その内訳はグラフのとおりである。予算は年々減少の傾向にあるが、入館者の増減等にかかわらずほぼ横ばいの額を維持している。このうち、展示活動にあてられる予算(当初)は平成 18 年度の場合 9,584 千円(全体の 4%)、これより展覧会 6 本のほか、常設のメンテ・展示替え、移動展 2 回の経費を捻出している。また、社会教育施設として当館も例外になく比重の高さが求められる教育普及事業費は 1,568 千円と全体予算の 1%に満たない額であるが、

の導入を境に増加しており、近年は年 200 件ほどのイベントを展開している。したがって、展示・教育普及事業に関しては高い費用対効果が求められているといえよう。これに対し、資料収集保管費は安定した予算額を保有しているが、その内訳は資料維持管理のための環境整備と自然系部門の資料購入・製作に重きが置かれている。



【博物館利用者数】博物館の入館者総数は開館 12 年目の平成 4 年度に 10 万人をきり、近代美術部門の移管とリニューアル準備に伴う事業縮小を行った平成 11~13 年度に加速度的に低迷した。そして、リニューアルの予算凍結が確実視され通常の事業数に戻した近年は 38 千人をボーダーラインとして落ち着いている。ただし、平成 14 年度のマメンキサウルス出品、平成 17 年度の『義経』展開催など、一部の企画に関しては来館者数が盛り返しており、提供する側とされる側の意識のズレを認めざるをえない。



博物館の存在の可否が議論にのぼる昨今、そこに従事する学芸員の業務は「限られた予算と人員」という制約のなかで「いかにニーズを反映し費用対効果があったか」という行政評価を高めるため年々多様化してきている。その潮流に呼応し、当館では指定管理者制度が導入された昨年度より観客調査の分掌を設置、私がおその担当者に充てられている。しかし、現況は専門分野の片手間として 4 段階評価の利用アンケートを実施・集約する程度にとどまり、当館のミュージアムマネジメントにおいてどのようなデータを必要とするのかという導入部分で長らく躓いている。遅すぎたスタートであるが、今後しばらくは他館の取り組みなどを参考に試行錯誤していかなければならない。

※写真 館正面

